

クラウスの一日はある男とのコーヒーから始まる。ドリッパーにコーヒー豆を三杯入れた後、二人分の水量になるようミリ単位で目盛りを合わせてスイッチを押してコーヒーが出来上がるのをひたすら待つ。

暫くするとコーヒーメーカーから湯気が立ち昇り、クラウスの部屋を焙煎されたコーヒーの良い香りで満たした。

「入ったぞ」

真鍮の装飾が入った花柄の陶器のカップ二つ用意しながらコーヒーが入った事がある男に告げるが返事は返ってこなかった。

「砂糖は三杯で良かったんだよね？」

スプーンに入った砂糖を摺り切りで落とし、砂糖の高さを揃えながらまたもクラウスは聞くが、返事はないままだった。

出来上がったコーヒーをトレーに乗せて小さなダイニングテーブルの上に置くとようやくクラウスとある男との一日は始まる。

砂糖入りのコーヒーを出された男は、黄色い防腐剤の中で眠っていた。顔には既に生氣はなく肌は青白い、傷んだ白髪もまとまった様子はなくまるで海藻のようにゆらゆらと浮かんでおり、腹の辺りには内臓を抜いたのであろうか切開され縫合された跡があり不自然な程腹部の皮膚は引っ込んでたゆんでいた。

クラウスは慣れた様子でその男にコーヒーを差し出すと向かい合う形で自身も座り淹れたてのコーヒーをすすりながら男に語りかけた。

「聞いてくれよラザム、昨日の朝いつものように仕事場に出たら私の部下が皆死んでいたんだ。Phantの修正を担当していたアレックスも……一晩にして皆だ。アレックスは自決した痕跡はあったが部下達は分からない。外傷も無かったし自殺とも少し違うような感じだった。私の知らない内にバタバタと人が死んでいく……同じ志を持っていた仲間であった筈なのに一体どこですれ違ってしまったんだろうな」

ラザムと呼ばれた物言わぬ男が口を開く様子は無い、クラウスが欲しいと思った言葉をかけられる事もない。

クラウスが持つコーヒーカップはカタカタと揺れ、黒い波紋が表面には立っていた。

「ラザム、教えてくれ。私は何処で何を間違えたんだろうな……お前の言葉がもし聞けたのなら、今私は海底にただ一人取り残される事は無かったのかもしれない」

懇願するような声で目の前に居るラザムに語りかけても彼は依然として口を開く様子は無い。

「教えてくれ……頼むから、このままでは私は私でなくなってしまうそうだ」

クラウスは両手で自らの顔を覆うと、カップに注がれたコーヒーはそのままテーブルにこぼれ落ち、クラウスの膝元を茶色く染めた。

どれだけ語りかけてもラザムは返事をする事は無い、その事はクラウスも分かっていた。彼がどのように自分の目の前から居なくなってしまったか、彼は今どこへ居るのかも全て知っている。それでもクラウスにはラザムの言葉が必要だったのだ。

部下を亡くし、縋り付くような気持ちで Phant を託したアレックスも今はもう居ない。彼等が居なくなってしまった原因は自分自身にあるとクラウスは自分自身を責め続けていた。自分以外の誰も居なくなってしまったこのラダーの中でクラウスは縋るような気持ちでラザムによる言葉を求めている。

まだクラウスが大学生だった頃、クラウスはいつも一人で過ごしていた。厳格な両親の元で育て上げられ、飛び級をする程の頭の良さを持っていたが、同世代の子供達と遊ぶ自由を犠牲にする事を強いられるほどクラウス自身に選択の自由は許されていなかった。口にした食料、毎日着る服の選択、自分が学びたいと願う事や通う学校までクラウスが選ぶ事は出来ない。

親許を離れて一人で暮らす事になるまで、髪は耳から下まで伸ばしてはならず、よくシワが伸ばされた白いシャツにネイビーのパンツとサスペンダー、白い靴下とよく磨かれた革靴が彼の相棒だった。

お陰で周囲から天才と持ち上げられる程の頭脳を獲得出来、クラウスはいつも物珍しさから人に囲まれる経験をしてきたが、暫く時間が経てばそれも離れていく。彼には周囲の子供達のように流行を追ったり遊びを経験したりする事が出来なかったせいか、周囲の子供が出来る当たり前の事が出来ない事をコンプレックスとして抱え続けていた。同じ事を経験したいと思っているにも関わらず、全て両親によって自由が奪われていたのでクラウス自身は自分自身は人として大事な部分が欠けているという現実と常に向き合わざるを得なかった。

それは大学に入學しても同じだった。両親の庇護から逃れようとカリフォルニア州の大学に通い一人暮らしを初めたが、これまで抱え続けてきたコンプレックスは既に身体の一

部と同化しており簡単に剥がせるようなものではなかった。孤立したクラウドスの精神状態はどんどん荒れていき、それを象徴するかのように自宅の床には足の踏み場も無いほどのゴミが散乱していた。

環境が変われば人は変わると信じて実践してみたはいいものの、自分を変える事はそう容易い事ではないとクラウドスは実感した。それからは人との関わりを出来るだけ避けるようにして、プログラムと向き合う日々を過ごしていた。

そんな彼に転機が訪れたのは大学に訪れて二年目の事だった。非常勤で訪れていたラザムという男の授業が自分の興味と一致するロボット工学の基礎を学習する内容だったので、単位を取る事が出来れば丁度良いという気持ちでクラウドスは授業に出た。他愛ない時間を過ごすまま授業は終わったが、放課後校内でタブレットデバイスを広げ一人で参考書を読み耽るクラウドスの元に先程まで授業に登壇していたラザムが訪れた。

ラザムはクラウドスに興味があるようだったが、クラウドスの胸の内はやれやれまたかという気持ちだった。今まで自分を珍しがって見物しにくる野次馬のような人間は沢山居た。しかしそれは彼等の中で日常の中で発生したスキャンダルのような物と何も変わりはなく見物に來た人間と親交を深められるような事はこれまでの経験上無かった。

クラウドスには彼等が欲しているものは持っていたが、彼等が当たり前のように持っているものは持っていなかったのだ。故にお互いの用事はいつか一致しなくなる、馬が合わないければ親交を深める事もなく気がつけばまた一人ぼっちに逆戻りだ。そのような出来事にはもう飽き飽きとしていたので人と関わり合う事などもう諦めていた筈なのにまた相手をしなければならぬのかと。

「何の興味があつて僕に近付いてるのか分かりませんが、ただの興味本位なら辞めておいたほうがいいですよ」

クラウドスは参考書を見つめたままラザムを突き放すようにそう言った。自分だけの時間を邪魔しないでくれという一心で張った防衛線だった。

「興味があっちゃいけないのか？」

ラザムがそう返すとクラウドスはやれやれという気持ちで頭を抱えた。

「今までそうやって近寄ってきた人は大勢いた。僕が飛び級してるからとか、成績が良いからとか、まるで午後のワイドショーを見るかのように大勢見物に来るんです。はじめは僕も彼等と親交を深めたいと思っていた、けど無理なんです。僕には彼等が当たり前のようになっているものを持っていない。流行りのもの、話を盛り上げる為のユーモア、大学生らしい遊び方……僕は彼等が持っている何もかもを知らないが故に溶け込めない、溶け込めないからまた一人に戻る。分かりますか？僕は欠けているんですよ。その事に気付いた瞬間、誰もが哀れんだ目で僕を見る、もうそんな経験をするのはこりごりだ。だから、これ以上僕の心を乱さないでください」

気付けばクラウドスの拳には力が籠もっていた。もう関わらないでくれというつもりで放った感情的な一言のつもりだったが、ラザムは変わらないうひょうとうとしていた。

「別にいいんじゃないか？ 欠けてても」

「逆に私は君が羨ましいよ。俺が君くらいだった頃はずっとゲームばかりやっていて墮落した日々を過ごし続けていたからね。君の成績表を見て驚いたよ、私も君のようになったらって羨むくらいだ」

クラウドはようやくラザムの方へ視線を向けた。シワだらけのネイビーのシャツに埃だらけのボトムス、今の自分とは対照的な格好だったがラザムがクラウドを見つめる目は今まで自分に近寄ってくる人間のそれとはどこか違っていた。

「羨やむ程のものじゃないですよ、むしろ誰かに変わって欲しいくらいだ」

「そんなに気にするなら放課後一緒に遊んでみないか？ 失ったものを取り戻すにはまだ充分時間はある」

初めての事だった、他人に誘って貰うという経験は。突然の誘いにやれやれ面倒くさいという思いはどこに残っていたが、クラウドは自らの知らない内にタブレットデバイスで表示していた参考書を閉じ、ラザムの方へ身体を向けていた。

「じゃあ、19時にこの場所で会おう。座標のデータを送らせてくれ」

ラザムはタブレット端末を取り出すと約束の場所が記されているであろうデータをクラウドスへ転送した。送られてくるデータは単純な「URL」や住所を示す文字列だと思われたが、不思議にもそのデータは少しサイズが大きい。

少し不審に思ったクラウドは送られたデータが間違っていないかラザムに問いかけようとしたが、ラザムは既にその場にはおらずいつも通りの孤独な放課後の時間が流れていた。クラウドは溜息をつきながらラザムから送られてきたファイルを開くと何らかの音声データのようだった、ざらざらと聞こえてくるノイズのような音の中に何か不規則的な音が聞こえてくる。初めはその音が約束の場所の座標を示す数値を読み上げているのかと思ったが、数字を読み上げているようには思えない。

やれやれと不機嫌そうに溜息をつくクラウドは帰路へ急いだ。

下宿先の扉を開けると嗅ぎ慣れた臭いが鼻をついた。クラウドが寝泊りをしている住居は学生用に貸し出されているワンルームの賃貸物件だったが、玄関から続くフローリングにはもはや何を食べたかすら覚えていない食事の空の容器が纏められたポリエステルの袋や空き缶が散乱しており、長い間放置され続けてきたのか悪臭を放っている。もはや敷金は帰ってこないだろうという考えはクラウドには無く慣れた様子で廊下を進みリビングへと向かった。

リビングにはまるでここが生活圏だと言わんばかりにベッドとデスクトップ型のPC、それに接続された汎用作業用のアンドロイドの周囲を除きゴミが散乱している。

通常、賃貸用の住居の入居する際は住居内の設備の劣化を防いだり、防犯等の目的を兼

ねて管理会社側から汎用作業用のアンドロイドが支給される。炊事や掃除、ゴミ出しなどと言った簡単な家事はアンドロイドが行える他、フローリングや壁紙の状態を随時監視できる為入居者とのトラブルが起きた際の資料調達の役割も果たしていた。いわばハウスマイドを誰もが雇っている状態であり、人間はより生産的な行動に集中出来る時代になった。

だが、クラウドにとってアンドロイドという存在は自らの惨めさを忘れさせてくれる玩具でしかなかった。機能を意図的に停止させた上で頸動脈にあたる部位にデスクトップPCから接続を行い、中身を見渡して時間を忘れる事もあれば自らコードを書いて任意の命令を加えたり時にはアフターマーケットで仕入れたパーツを接続して遊んでいたお陰で家事などの本来の機能は一切果たさず家事をやった事のないクラウドの部屋はどんどん荒れていった。

クラウドはゴミの山をかけ分けながらカーテンを閉めるとデスクトップPCにラザムから貰ったサウンドデータを転送し、更にアンドロイドにデータを転送した上で改造したアイセンサーからホログラムを出すよう指令を出した。

すると、暗くなったリビングの中央にオーディオスペクトログラムが青い粒子状の光で投影される。投影された画像は地図のような図形を示しており中央に一点だけ赤い点が記されていた。

クラウドは地図を開き赤い点が指し示す点を探し当てるとある店の情報が浮かび上がる。

ネイサンストリートバー

それを見たクラウドは溜息をつく、座標をメモに取って身支度を始めた。

その日の夜、クラウドはメモに書き記されたバーの住所へ向かう。普段は絶対に足を踏み入れないであろう繁華街のネオンや、空中に投影された広告群がめまぐるしく街を照らしていた。居住地やビジネス街等では景観の問題で禁止されている空中に投影されているホログラム状の広告群は繁華街に限っては規制はさほどされていない。

故に治安もあまり良くなく街の至る所に吐瀉物やゴミが散乱しており、肩や脚の多くの皮膚を露出した女性や、左腕がサイボーグの義手に改造されていた男性等が酔っ払いながら路上に座り込んでいたり、身体中にギラギラとした装飾を纏いながら人間では決して出来ないであろう程露出度の高い女性型アンドロイドがそこら中闊歩していた。

クラウドは昔から両親に絶対に近寄ってはいけない場所として厳しく教え込まれていたもので、繁華街に足を踏み入れる経験は初めての事で周囲の人々と比べると自分はいくらにも似つかわしくない存在でありなんて野蛮な世界なのだと哀れみの目を投げ掛ける傍ら、初めて自分の意思で両親の言い付けを破ることに対して微かな嬉しさも同時に持っていた。

ネイサン・ストリートバーと書かれた建物に到着した。繁華街の外れにあるレンガ造りの古めかしいバーで、入り口には古びたネオン管が点いたり消えたりしている。ラザムか

ら貰ったメモの住所と地図アプリの示すポイントは一致していたのでここが約束の場所である事に間違いは無かったが、後になって地図を確認すると先程まで通らなかった繁華街をわざわざ通らなくても辿り着ける近道があった事に気付き、クラウスは肩を撫で下ろす。

奇々怪界とも言える慣れない道を通ってきた疲れをどこかで癒したいと思っていたが、時刻は約束の時間をとくに二十分も過ぎていた為クラウスは焦った様子で入口の木製の扉の鉄製のノブに手を掛けた。

中に入ると、来客を知らせるベルが音を立てて店内に居る客の殆どの視線がクラウスの元へ集まる。店内の者達を見渡す限り、先程まで通ってきた繁華街で見てきた人達のそれとほぼ同じような格好の人間ばかりであったので、クラウスの存在はあまりにもその場に似つかわしくない存在である事がすぐに分かった。それに、クラウス自身はまだ未成年であった為酒を飲む事など論外である。

クラウスはもしや自分は騙されたんじゃないかと疑おうとした瞬間、店の奥から聞き知った声が聞こえてきた。

「おお、来てくれたのか」

ラザムだった、大学で会った時のままのよれよれのシャツのパンツ姿で出されたばかりのスコッチを煽りながらぶっきらぼうに手を上げてクラウスの方を呼んでいた。

クラウスは少し恥ずかしい気持ちだった、大勢の視線を集めておきながら更に大きな声を自分に向けられたら一体何が始ったのかと思われてしまう。これじゃあまるで酔っ払いの父親を迎えに来た息子のようなだ。クラウスは機嫌を損ねたのか少しずかずかとした足取りでラザムの元へ向かった。

「悪いな、まだ未成年なのにこんな店に呼び出してしまつて」

ラザムは手に持っていたグラスを持ち、結露で濡れたカウンターを少し拭くと席を立ち店の奥のボックス席へと向かった。

「恥ずかしいので大声で僕を呼ぶのはやめてください、それに僕はここで何を飲めばいいって言うんですか」

クラウスの周囲には見たこともないような色の恐らく酒類であろう飲料が入った瓶が羅列されている。小さい頃父が空けていたボトルでさえも見当たらず知らない世界そのものだった。ラザムは悪い悪いと言いながらバーテンダーにコーラを頼むと慣れた様子で赤い合皮のソファに腰を下ろすと隣へ座るようソファを手で叩く。

ラザムに促されるままソファに座ると間を待たずグラスに注がれたコーラが運ばれてきた、霜のついたグラスの中に所狭しと氷が詰められており、天辺にはライムと赤いストローが添えてあった。クラウスは少し不貞腐れた様子でコップを持ちコーラを少しづつすすります。

「私が大学生の頃はこういう所で遊んでたんだが……最近の子は酒はあまり飲まないか。」

「どうだ？遊びに出てみた気分は」

「どうも何も僕はまだお酒は飲んじやないけない年齢だ、もうちょつといい場所があったでしょう」

ラザムの質問にクラウスが返すと、ラザムはそれはそうだと笑い出す。正直何がおかしいのか見当もつかなかったなのでこの時クラウスはもしかして自分が馬鹿にされているのではないかと思った。

「いいや、ごもつともだ。だが酒が飲めなくても話くらいは出来るだろう？それに私の渡したデータの解析が出来たのも君が初めてだ。感心したよ、どう解析した？」

「オーディオスペクトログラムなんて単純過ぎますよ、暇つぶしにもならない。頂いたサウンドデータをアンドロイドのアイセンサからホログラムとして投影させたらすぐ出てきた」

ラザムに試されていた事にふてぶてしい態度を取りながらクラウスは語るとラザムはアンドロイドの改造パーツの仕入れ先や改造に至るまでの方法を五月雨式に質問をぶつけた。

それに対しクラウスは淡々と質問に答えると、ラザムはグラスをテーブルに置いて背中をソファに預けて笑い出す。

「大したものだ、一人でそんな事までしてたなんてな。でも何がきっかけで君はそんな事を？」

「人と関わっていてもどうせいつかは皆離れていく。そうだと分かてるなら初めから関わらない方が良く。でも一人で居ると暇だから暇潰しに……ってくらいですよ。感心される程のものじゃない」

「そうか？私は君が暇潰しで得た才能こそ素晴らしいと思うし、羨ましいと思ってるくらいだ。私の授業の評点もかなり高いしそれにサウンドデータの解析もあつという間にやってのけた。私は君の事を羨ましいと思うよ」

クラウスは何となくやりづらい思いだったが、悪い気はしなかった。今まで誰かに褒められる事は滅多に無かったし、まさか暇潰しのつもりでやっていた事をここまで評価してくれる人物が現れると思ってもいなかったからだ。

だがこれまでの経験上、暫く経てば自分という存在に興味を無くした一人に戻ってしまう事を恐れてしまう思いがクラウスにのしかかるとそのまま身体に現れるように猫背になって丸まってしまう。

「ありがとうございます……でも、やはり僕はあなたの思うような人間じゃない。周りが羨むような成績を持っても、何かの才能があったとしても僕の周りからはやがて人が消えていく……僕自身に魅力がないからだ。だからもう僕を迷わせないでください」

クラウスの手は小刻みに震えていた。

「本当にそう思うか？」

ラザムはあっけらかんとした態度でクラウドスへ言葉を投げかけた。半ば必死に拒絶したにも関わらず怒る様子も無かったが、クラウドスはラザムの顔を直視する事は出来なかった。

「君にも色々苦勞があつたんだろうが、私は君が魅力の無い人間だと思わない。君が誰かと上手くいかないと思ひ込んでゐるのなら、それは君の居る場所がたまたま悪かつただけだ。そんな場所、さつさと逃げてしまつて自分の行きたい世界に行けば良い。と私は思うがね……」

「そんな場所、あれば良いんですがね……」

「あるじゃないか。少なくとも私は君にも、君の才能にも興味がある。私も転職してきたこの場所で仕事をしながら非常勤で講師などやっているが、私と同じ分野でここまで精通してる人間に出会えると思つてもいになかつた、だから今はすごく楽しいんだ。君との時間がね」

「えっ」

「君ともつと語りたい。私には君が必要だ」

このような事を言ってくる人間はクラウドスのこれまでの経験上居なかつた。今日の前に居るラザムは真剣な眼差しでクラウドスの方を見つめてくる。先程までは彼を拒絶していたのにも関わらず、君が必要だというその一言でクラウドスの心はかつてない程揺さぶられていた。

緊張で乾いた喉に唾がぐくんと流れ落ちる感覚を感じて、とっさにグラスに手を伸ばした瞬間、クラウドスは自分の知らない内に身体をラザムの方へ向けて前のめりの姿勢になっている事には気付かなかつた。

「ええ……僕で良ければ……」

その夜、クラウドスとラザムは夜が明けるまで自論を展開しながら語り合つた。とても不思議な時間だつた、これまで誰かによって用意されていたレールの上を歩かされていて、それから外れる事をずっと恐れていたのにその一步を踏み出せたような快感と、自らの腹の底から出てくる言葉で会話をする快感がクラウドスの時間の感覚をどんどん奪つていった。

時計の針が午前二時を回りそろそろ寝なくてはならない。という時間であつても今はこの場所で延々と語りたいという気持ち遥かに勝り、未知の時間へと進む度どんどんトリップしたような感覚が進んでいく。

気付くと店の窓から朝日が差し、どつと重くのしかかるような疲れが一気に身体に流れ込んできた。

「そろそろ今日はお開きだな……」

ラザムはカウンターへ向かい支払いを済ませるとそのまま店の外へと向かつていった。クラウドスはそれを追うように付いて行き、ラザムと一緒に外へ出ると外はすっかり青い空に囲まれた朝の世界へと変貌していた。

「あの、飲んだ分のお金は払います」

クラウスは財布を取り出すが、ラザムはそれを拒んだ。

「どうだった？朝まで遊んでみた経験は」

「……すごく眠いです。でも、あなたとの時間は楽しかった。ありがとうございます」

「それは良かった。これで君も普通の学生の仲間入りだ、今日は週末だったからこれから寝ても問題ないが、平日に遊び惚けて講義に遅れないようにな。それじゃあまた」

ラザムはクラウスに背を向けてあくびを交えながら歩き去っていく。その様子を見ていたクラウスは、経験したことのない特別な時間が終わろうとしていた事に少し寂しさを感じていた。出来る事ならずと語っていたかった、夜など明けなければいいのにと――。

「ラザムさん」

気付けば大きな声でラザムの名前を呼んでいた。自分の思っていた以上に大きな声であつたので自らの声に耳鳴りを感じる程だった。

「また、今日と同じような時間をあなたと送っても」

「勿論さ、今度は君の家で語り合おう」

嬉しい返事であつた、と同時にクラウスの頬は少ばかり紅潮していた。これまで時間を忘れる程誰かと話す事に夢中になった人間はラザムの他に居なかった為、寝不足でふらついていたクラウスの身体に活力が戻ってきたような感覚がした。

それに、今度は自分の家に来てくれるなんて。そう思うと感じていた疲れがどうでも良くなったような感覚が湧いてきた。

今日感じた気持ちは絶対に忘れないようにしよう。クラウスはそう思いながら帰路へとついった。

次の日、クラウスは黙々と部屋の掃除を始めていた。作業用のアンドロイドの手を借りずゴミの分別方法で分からない事があれば内容が無いに等しいキュレーションサイトからの知識を仕入れ、ゆっくりであつたが着実に掃除を進めていた。幸いごみの大部分はプラスチックの食品容器類であつたので、粗大ゴミの処理等で苦勞する程では無かつた。

慣れない作業ではあつたので疲れてしまう事は多々あつたが、ラザムの顔を思い出すと再び頑張る事は出来たので、丸々二日かけて何とか人並に過ごせる部屋を取り戻す事が出来た。

掃除を終えたクラウスの顔は清々としたものだった、長らく自分を縛り続けてきた枷が取れたような感覚と、これから自分自身の為の時間が始まるのだという喜び。そして今の自分なら何にでもなれるという全能感。もう過去の自分とは違うのだという自信がクラウスの胸の中にあつたが、その自信の一部は翌日あっさりと失ってしまう。

ラザムと会った時に徹夜をしまして生活リズムがずれてしまったせいかな、多少の睡眠不足感を残しながら大学へ登校するクラウスの眼前に映るキャンパスはこれまでの風景とは違ったものに見えたが机に腰を下ろした瞬間、これまで嫌という程見てきた風景がまた蘇ってくる。

周囲で他愛のない話をする自分より少し上の世代の人々、誰もが見知った顔である筈なのに彼等が話す言葉を上手く聞き取ることが出来ない。先日、ラザムとの出会いで自分もようやく、そちら側の人間になれたと思っていた筈だったのに目の前に居る人々が作っている無数の輪の外にぼつんと自分は居て、無数に聞こえてくる言葉の数々が圧縮された一つのサウンドのように聞こえてきた。

いずれかの輪に自分から入っていけばいいのだろうか、だがどうやって……突然の外れな話題を持ち掛けて沈黙を作ってしまったら……話を合わせるにも彼等が話している言葉が理解出来ないままどうやって……

考えれば考える程クラウスが居る世界は周囲とは遠くなっていき、元いた孤独の世界が蘇りつつあった。先日まで感じていた全能感がまるで虚構であったかのように大学の一生徒としての自分は無力であった。

結局クラウスはその日、誰とも話すことのないまま講義が終わる夕方まで一人で大学で過ごした。

「―この前誘ってくれたバーであなたと過ごしてから、学校でも独りになる事は無いだろうと思っていたんですけど……」

放課後の夜、クラウスの下宿先でラザムに大学内で感じた孤独について話を持ち掛けていた。クラウスの部屋に備え付けられていた改造されたアンドロイドを興味深そうに見回しながらラザムは陽気な気持ちでこう言った。

「住んでる世界が違えば話が合わないのは当然さ、別に君が彼等に合わせようと努力しなくてもいいんだよ。君は君の居るべき場所が必ずある、それは君が今居る大学には無いだけの事だ」

「そういうものでしょうか……」

クラウスはアンドロイドのパーツをまじまじと見渡すラザムの背中をじっと見つめていた。

「このアンドロイド、随分弄ったな。ここまで拡張するとメーカーの定期検査に引っかかるのか……もうオリジナルの部分殆ど残っていないぞ」

クラウスの持つアンドロイドはもはや人とは呼べない形にばらばらに分解されており、頭部や脚部等のパーツがそれぞれ分離されて、様々な機器に接続されていた。賃貸用として貸し出されているアンドロイドは通常、クルマの扱いと同様でメーカーによる定期検査が行われていた。誤作動や故意の改造によるトラブル、または事故等を避ける為であり、機能を拡張する為のアプリケーションをインストールする事は許されていたが、メーカーによる審査は厳しく、認可の通ったアプリケーション以外のものやOSの書き換え、分解等は禁止されている。

「ああ……もちろん引つ掛かるとは思いますが、元の形に戻す事は容易いですしOSも書き換えはしてまずけど、それも起動画面のディスクットにダミーを仕込めば大体の事は回避出来ますよ。流石に工場まで行って精査されれば手を加えたことはバレるでしょうけど」

クラウスがそう言うのとラザムは腰を曲げて笑い出す。

「いやいや恐れ入ったよ。私も昔はコイツの中身を見回して遊んでいたものだが君程手の込んだ事は出来なかった。尊敬するよ」

「しかし、ここまでコイツをいじろうと思ったのは何か思ってたの事だったのか？」

「……最初は中身を見たり分解してみたり、そういう所で留まっていたんですけど、関節の動きがまだ少しぎこちないと思ったので……気付いたらアフターマーケットでパーツを買い漁りながらここまでになってました。今はこのアンドロイドで何が出来なのか、それを追求してみたい……っていう所でしょうか。人の役に立つ事を考えたり、そういった事はまだ無いですけど」

「……それなら、ウチでインターンとして働いてみていいんじゃないか？」

「ウチの会社は家庭用アンドロイドのソフトウェア開発をやっててね、君が今いる環境よりずっといいものは提供出来ると思うし、学校より君と相性の良い人間は沢山居るだろう……勿論仕事ではあるから好きな事を仕事にしてみようジレンマもあるだろうが……多分君にとってそこまで悪い話では無い筈だ」

ラザムは名刺入れから自分が所属している会社の名刺をクラウスに差し出した。クラウスにとっては願ってもみない事であった。暇つぶし同然にやってきた事が誰かに認められる事など今まで考えた事が無かったからだ。それにこれまでの自分を一切否定する事なく自分の話を聞いてくれるラザムの事が何となく好きであったので、ラザムと更に一緒に時間を過ごせる事を考えると胸が躍った。

「でもいいんでしょうか？突然僕みたいな人間に仕事なんて」

ラザムはクラウスの顎を右手で持ち上げ、自分の顔の方へグイと寄せる。ラザムの剃り残した髭や青い瞳の色をじっくりと見られて、彼の吐息の湿り気を感じる事が出来る距離だった。

「なんなんですか、突然」

ラザムは物を言わないままクラウスの頭を撫でて前髪を持ち上げた。

「……髪、上げたほうが似合うな」

「そういう話をしてる場合じゃないでしょう」

「さっきも言ったらう、君には君の居るべき場所がある。勿論君は大学在籍中の身だから正社員としては雇ってやれないが……でも君の技術なら大丈夫だ、どうだい？」

ラザムの瞳を見ていると心拍がどんどん早くなっていく、自分という体裁を取り繕う為の嘘や迷いを述べる事すらもどうでも良い、今はラザムと一緒に居られる時間がもっと出

来る事がクラウドにとっては重要だった。

「あなたがそこまで言うてくださるのなら……」

「決まりだな、それと今後はもう敬語で話さなくてもいいぞ。学校では教師と生徒だが、今は一友人として話しているだけなんだから」

「しかし……」

クラウドが再び戸惑うと、ラザムはクラウドの唇を人差し指で抑えつけた。

「いいんだ、元々誰かに恐縮されながら話すのが苦手だね……だからこれは私のわがままとして聞いて欲しい」

「……分かった、ラザム」

「はは、それでいい。じゃあ明日私の会社まで来てくれ。住所は名刺に書いてある」
ラザムはそう言うと、クラウドの元から去っていった。

次の日の放課後、クラウドはラザムの名刺に書いてあった住所を頼りにオフィスへと足を運んだ。地図上のアプリケーションが示す座標と自分が実際に居る場所を何度も確認しながら人気の無い雑居ビルのガラス戸を空けると、一台の電話が置いてあった。

その上部にはラザムから貰った名刺に書いてあった会社の名前と一致する文字が書いてあったので、自分が来た場所はここで間違いは無いだろうという確信を持った。あとは目の前にある電話に手を伸ばしてラザムを呼び出せば良いだけだが、クラウドは電話を取る事を躊躇っていた。

ラザムからインターンとしての誘いがあったのは昨日の今日の話だ。それまで普通に働いていた人達が自分の事を知っていてくれているだろうか、そもそも未だ社会に出て働いたことの無い自分がこんな場所に居ても良いものなのだろうかという一抹の不安がクラウドの中にはあった。

眼の前の受話器に手を伸ばせば内線が繋がってそれで終わりである筈なのに、クラウドは受話器の前で立ち止まることしか出来ないでいた。

そんな中、ここのオフィスの人間であろうか。首元にタグをぶら下げた人間がクラウドの眼の前に現れた。もしやラザムかと少々期待混じりな気持ちで顔を向けたが、その人物はラザムではなかった。

「君はもしかしてラザムが言っていたインターンの子かい？」

30代程であろうか、細身でカジュアルな服装に身を包んだ男性がクラウドに話しかけてきた。

「あつ、はい。ラザムさんに呼ばれて……」

「良かった、君を待っていたんだ。案内するからついてきてくれ」

ラザムは言われるがまま男性についていく。オフィスへ向かう為のエレベーターの中で話かけられ多少の居心地の悪さを感じたが、学校に居る時程ではない。少なくとも自分が好きでいじっていたアンドロイドのシステムの話が通じたので、クラウドは少し安心した。

「すまない、ちょっとラザムを呼んでくるからここで待って貰えるかい？」

オフィスに案内されると来客用のミーティングルームに通され、クラウドはそこで一人待つことになった。道すがら恐らくこれから自分が働く事になるのであろうオフィスを見ると、そこら中にアンドロイド用のものであるロボットがデスクトップPCと接続されており、自分の部屋の延長線上の空間だと思い、少し居心地の良さを感じた。

これから社会に出て何をしなければならぬか、霞の中をぼんやりと浮かぶものを今まで見続けていたが、やがては自分もそこへ入っていかねばならないという不安もあり、そこで何をすべきなのか、社会の一員となった自分は役に立てるのか。数々の不安が頭をよぎっていたが、それは杞憂であったのかもしれないと思った。

四半時程そのような事を考えながら一人で過ごしていると、見慣れた男がクラウドの元へやってきた。

「悪い、ミーティングが押してしまつて。待たせてしまつて悪かつたな」

ラザムだった。働いている時は別人のようになっていのかと想像したが、そうではなくキャンパスで会った時と全く同じ印象だったので、クラウドは少し不思議な気持ちになった。

「あの、本当にいいんでしょうか。僕みたいな人間が突然こんなところで」

「何も気にする必要はない、こっちも君のような人材に巡り会えて嬉しいよ。ついてきてくれ、君の席へ案内する」

ラザムの後を追うようにアンドロイドの様々な部位が散乱するオフィスの中をついていく。所々の作業ブースを見てみるとデスクの上にはデスクトップPCと様々な私物や飲みかけのジュースが放置されたマグカップが散らばっていた。これまでは、オフィスの中では私物を持ち込む事や好きなものを食べたり飲んだりする事はご法度だと思っていたクラウドは、その光景に少々面食らった。

そんな中、デスクトップPC以外まだ何も置かれていない真っさらなデスクが置かれた場所にたどり着いた。

「これが君の作業ブースだ、PCのセットアップは一通り済ませたが、細かい所の調整は君のやりたいように調整してもらつて構わない。オフィスにある備品も必要なら自由に使ってもいい」

「これが、僕の……」

「そうだ、これが君の新しい居場所で今日から当たらしい社会の一員だ。仕事だから好きな事ばかり……とはいかないけど、ここの経験が君にとって有意義なものである事を祈っている。早速デスクに座ってみるかい？」

ラザムに言われるまま備え付けの椅子に腰を落ち着けると、クラウドはこの場所に自分が受け入れられたような気がして胸が躍った。これまで誰にも理解させることのなかった

であろう自分の趣味を受け入れてくれる場所があるのだという充実感と、自分でも誰かの役に立つ事ができるという感情が一気に頭の中を駆け巡る。

「あの、ラザムさん……ありがとうございます、僕をこんな場所に招いてくれて」

「礼を言いたいのはこちらの方だよクラウス。暫くは学業の合間で……という形になるが、これからよろしく」

「よろしくおねがいます」ラザムさん

ラザムとクラウスがその場で握手を交わしてからクラウスがオフィスの環境に慣れるまでそう長い時間はかからなかった。仕事は人とのコミュニケーションやクライアントとのやり取りにこそはじめは苦戦したが、周囲のサポートを経ながらクラウスはめきめきとスキルを伸ばしていった。

クラウス自身も自分の居場所を見つける事が出来て、充実した気持ちを抱えたまま仕事に向き合える事が出来る事に喜びを覚えていたが、ある一つの想いを胸の内に抱えていた。

自分に働く場所を与えてくれたラザムへの感情が日に日に増していく事をクラウスは感じていた。それは尊敬の念ではなくもっと別な何かであった。こういった場合、普通の青年というものは異性の恋人を作ってみたくなくてもおかしくはない年頃であった。

オフィスの中には女性も居て、自分と近い年齢の男性が恋人を作ろうと躍起になっていたり、実際に交際をしている事例もある事を知っていたが、異性と交際をするという事象において羨ましいと感じる事は不思議と無かった。

この胸の内に秘めた想いを誰かに相談してみようかと迷ったこともあったが、自分のような事例はマイノリティであるという自覚もあったので、誰かに話す事はなかったが、その分ラザムへの想いは胸の中から今にも張り裂けそうな勢いで広がっていった。

孤独な大学生の頃と比べれば自分はとても豊かになった。そしてその豊かな生活を与えるきっかけを与えてくれたのが他でもないラザムだった。これまではその事に対して恩義を感じているだけだと思っていたが、それとは少し違う。

この感情の正体は何であるかのおおよその察しはついていたので、ラザムに打ち明ける事は躊躇われた。自分の思いをラザムに告げる事で逆にラザムとの距離が離れてしまうのではないかという恐怖があったからだ。

それにクラウスはまだ大学生という身であり、ラザムもクラウスの通う大学の非常勤講師である事は知れていた。学生と教員が、それに同性で交際しているという噂が大学内で流布される事を考えただけでも身の毛のよだつ思いだった。

―この思いは大学を卒業してからラザムにきちんと伝えよう。

学生だったクラウスは、そう決心した。

それからクラウスが感じる時間は過去よりずっと長いものになった。大学にいてもオフィスにいても常にラザムを意識してしまう。してしまうが自分の想いを伝えるタイミングは今ではない。そのような悶々とした日々を過ごしながらカレンダーに一つづつ印を付けて、ラザムへ思いを伝えるその時の時間がゆっくりと近付いている事に希望を見出しな

がら過ごしていった。

そして、遂にその時がやってきた。大学の卒業式の日、自ら法衣に身を包み卒業証書を空に向かって思い切り投げ飛ばした。大学を卒業したという喜びよりも、ラザムに思いを伝える日が遂にやってきたという思いの方が強かった。

大学の中にラザムの姿は見当たらなかったが、非常勤講師であった為かクラウスはそう不思議には思わなかった。それでもいい、それに今ではない。

学生としてではなく、社会の一員として自分はラザムの元へ行くのだー。

オフィスに到着すると、自分の仲間たちがこぞって自分の大学の卒業を祝ってくれた。花束やサプライズでケーキまで用意してくれる人までおり、クラウスはこれまでに無い程の謝意を述べた。

だが、そこにラザムの姿は見当たらなかった。オフィスの中の予定表を見てもどこかへ行った様子も無い。クラウスはラザムは何処へ行ったのかと同僚に訪ねてみると暗い顔でその返答が返ってきた。

「ラザムさんは昨日、ここを去りました。元々住まわれていた東海岸で何かがあったようで……それ以上の事は我々も聞いていないのですが……」

「その、東海岸のどこへ行ったか聞いてないですか」

「そこまでは……」

心にぽっかりと穴が空き、そこへ冷たい風が吹き付けるような気持ちだった。つい先日まで当たり前だと感じていた日常がラザムという存在が居なくなっただけで崩れ落ちてしまふなんて思いもよらなかった。

クラウスはこのままラザムとずっと一緒に仕事をしたいと当たり前のように考えていたので、突如訪れた現実と向き合うにはあまりにも情報が不足していた。

クラウスはその日の内にオフィスの代表へラザムの所在を聞きに行くと、ラザムの親戚の不幸があったこと、そして子供の世話をしなければならぬという事だった。

ラザムが今まで自分にはそのような事を告げた事は一度も無かったし、彼が既に結婚をしている事すらもクラウスは知らなかった。

腹立たしい思いが湧いて出てきた。ラザムに対してではない、ラザムに対して理解が浅かった自分に対して無性にどこかへ怒りをぶつきたい気持ちでいた。

そして、自分ではない別の誰かと既に幸福な時間を過ごしていたのに、その場所へ自分も入りたいと感じている自分の不甲斐なさや惨めさも感じていた。すぐにでもこの思いをどうにかしたかったが、クラウスの中のラザムの想いはそれを許さない程大きくなっていた事もクラウス自身は分かっていた。

帰宅したクラウスはリビングの電気を付けた。孤独だった頃とは違い部屋の中は掃除や整頓が行き届いており、いつでも来客を迎えられるような体裁も整えられていた。だが、今はその部屋がすぐく空虚に思えて仕方がなかった。まだ大学に在学していた頃ラザムを迎える為に整えていた部屋も今はその役目を終えたような気がしてならなかったのだ。

やる事が無かったので、デスクトップPCの電源を入れていつものように自分で改造していたアンドロイドを操作する為のコンソールを開く。モニターには黒地に黄緑色の文字群が表示され、クラウスがコマンドを入力する事で任意の命令を加えられるよう今かと待っていた。

それを見たクラウスは、喉の奥から強烈な不快感を感じて、すぐさまベッドに倒れ込んだ。酷い車酔いにも当てられたようだった。これまではこのような事は一切無かったが、どういう訳かアンドロイドを操作する為のコンソールを開いた時にだけそのような症状が出てきてしまう。

かつてラザムとの仲を繋いでいたアンドロイドという存在は逆に、クラウス自身の不甲斐なさや惨めさ、そしてそう感じても尚諦めきれない、ラザムへの想いがトラウマのように逆流してしまうようになっていた。

「なんて人生だ……なんて……」

その事を察したクラウスは、もう自分は元の仕事は出来ないであろうという事のおおよその察しはついていた。

涙が流れ落ちてきた。長い時間胸の中で温めてきた想いと自分とラザムを繋いでいたものが全て崩れ落ちてしまったのだ。枕を涙で濡らし続けて気が付けばカーテンの隙間から朝日が差し込んでいた。

それを見て眠っている場合ではないと感じたクラウスは、ベッドから立ち上がり段ボールを取り出すと、部屋にあったものを段ボールの中へ詰め込み始めた。

そして、その日を堺にクラウスは自らが勤めていたオフィスに現れる事はなくなった。

それから、二年の月日が経った。

アメリカの西海岸から職を転々としながら東海岸へ移り住んだクラウスは、暮らすには不自由無い程の収入や実績を得ながら過ごしていた。以前のようにアンドロイドそのものに触れる事は出来なかったが、実際に見て触らなければ良いという事が幸いし電脳内のデータ処理を行うサーバーサイドの仕事に方針を転換する事で、何とか自分の立場を維持しながら食い扶持を稼げるようになっていた。

東海岸へ移り住んだ事は自分にとっては単なる偶然が重なり合った結果だというように自分を納得させていたが、実際は心のどこかでラザムを追い続けたいという願望がクラウス自身を動かしているという事に本人は気付いていないでいた。

それを象徴するようにクラウスの周囲には人は居ない。共に働く仲間は居るが、友人という関係性にまでは発展する様子もなく次へ、また次へ居住の場所を東海岸へ進めていくことだけを考えていた。故にクラウス自身も自分が天涯孤独の身であるというおおよその察しはついており、それを良しとしていた。

自らにきつかけを与えてくれてそれで尚、それなりな生活が送れるようになったのは紛れもなくラザムのお陰だ。だから自分の友人はただ一人、ラザムだけで良い。この先どれだけ出会いがあったとしても彼に勝る事は無い。自分にとってそれだけ彼は特別な存在なのだからと思っていた。

「1年経った今でも尚ラザムからクラウスの元へ来ることの無かったが、それでも良かった。自分は美しかった過去の思い出を感じながら生きていくだけで充分なのだと、そう思っていた。だが、それでも微かな可能性に身を託してラザムは単身東海岸へやって来た。

そこで暮らし始めてもう1年は過ぎていたが、当然ラザムの痕跡が見当たる事はない。無理もない、街に出れば人は大勢いる。その中で特定の人物と偶然出会う事などそうそう無い事だ。自分と同じ時間に同じ場所に居る事という前提ですら実現性の薄い望みであるのに。

クラウスは行きつけのバーの扉をくぐると、赤い合皮のソファに慣れた様子で腰をかけてホットコーヒーを注文した。もう成人になっていて酒を飲んでも構わない身分ではあったが、結局酒は自分の身体には合わなかった。

ただ、偶然見つけたバーの一つが西海岸でラザムと一緒に過ごした時のバーの内装に似ていたから。という理由で何をする訳でもなく、ゆっくりと店内の風景を見渡しながらコーヒーをおろす事がクラウスの日常になっていた。

今日もまたあの人との思い出に浸ろう。そう考えながらブラックコーヒーのお替りを注文しようとした時、店内に見覚えのある人物が目に入った。シワだらけのネイビーのシャツに埃だらけのボトムス、そして栗色の毛。あれから長い年月が立ち、顔立ちは少し変わっていたが、クラウスが見た人物はかつて一緒に過ごしていたラザムに酷似していた。

このような事があるのだろうかとかと我が目を疑いながらも、クラウスはその男に向かって歩みを進めていた。もし自分が今見ている男が本当にラザムだったとしたらこれ以上の幸せはない。

「あの……君はもしかして、ラザムじゃないか？」

「その声……クラウスか？」

ラザムに似ていた男はクラウスの元へ振り返る。その顔は紛れもなくラザム自身だった。頬はこけ落ちており、目が多少やつれていたが、間違いない。

「そうだ……ようやく見つけた。1年前からずっと君を心のどこかで探し続けた」

「そうか……クラウス、君にはすまない事をした。久しぶりに再会出来たんだ、折角だし少し話をしていこう。君が座っている席はどこへ？」

ラザムがそう言うと、クラウスは喜々として自分が座っていたソファの元へラザムを案内した。

「懐かしいな……西海岸で君を誘った時と似た眺めだ」

「ラザム……私は君に伝えたい事が一つだけあったんだ。1年前渡しの前から姿を消した理由はもう今になっては問い詰めない、けどそれだけは……聞いてくれるか？」

クラウスの言葉にラザムは一口酒を煽ると神妙な面持ちでラザムは語りだした。

「君の想いには気付いていたよ。でもそれは今ではなかった、どうしてもやらなきゃならなかった事があったから……」

遠い場所を見つめながら語るラザムがどのような思いだったのか、クラウスはおおよその察しはついていた。誰にでも家族は居る。

「クラウス。突然だが、君はこの世で最も大事なものを失ったとしたらどうする？」

「もし仮にそうなったとしたら、自分がこの世界で生きている意味は無くなるだろうな……」

「だろうな、私だって同じだ。でも遅かれ早かれ誰だってそういう経験を一度は味わうことになるだろう、私達が人間である以上な」

「例えば私が事故に遭って死んでしまったとしよう、きっと君は私の想像するよりずっと悲しむだろう。その悲しみはどこから来る？もう私に会うことは出来ないという想いなのか、同じ時間を共有出来ない事への悲しみか。死という肉体的な摂理によって今の私達が決してたどり着く事は出来ない領域へと分断されてしまったという事なのか……」

ラザムはグラスを持ち上げると酒を一気に煽った。

「……何が言いたいんだ？」

「もし、その死という摂理そのものを否定する事が出来たら……愛している人間とずっと一緒に過ごせる場所があったらどうする？」

「どうって……そのような場所があったらいいが……」

「数年前に人間の脳の全ての解析が終了したというニュースを見たことはあるだろう。脳内の情報のデジタル化に成功した事で、我々人間の魂とも言える意識の所在が明らかになった。私は今、その人間の意識を大西洋沖にある巨大な海底サーバーに転送する事を試みる実験をしている。クラウス、私と一緒に働かないか？」

願ってもない言葉だった、あの美しかった日々をもう一度ラザムと共に過ごせるのであれば、仕事の質などどうでも良かった。

「ああ……私で良ければ喜んで」

「しかし、この仕事は我々が直接大西洋沖の海底に赴いて、サーバーが開始されるまで海底の中でずっと過ごさなければならぬ……地上の世界の名残惜しさに鬱病を発症してしまう可能性だってある……それでも本当にいいのか？」

「ラザムの居ない世界なんて私が生きる価値の無い世界と同じだ。例えそれがどこであったとしても私は君についていく」

「……分かった、話は通しておこう」

ラザムの話をきっかけに、クラウスはラザムが在籍していたラダーというアンドロイド製造企業に身を置くことになった。ラザムの推薦とクラウスのこれまでの実績が幸いし、入社して間もなく、サーバーサイドエンジニアのチーフとしての役職が与えられ、ラザムとクラウスをはじめとする数名の研究員達は死後の世界を模倣した巨大サーバーがある研究施設、ラダーに向かう潜水艇へ乗船する事になった。

死後の世界を実現させるサーバーの名は「ベンサレム」というものだった。死を得た先にある終わりの無い約束された理想郷を象徴するものとしてその名が与えられた。これまでに死という領域に足を踏み込んだ上で元の世界へ帰還した人間の確かな証言は無かった。

無かったが故に人々は空想の世界を作り続けたが、遂にそれが人間の手の届く所までやってきたのだと思うと、クラウスの胸の中は高鳴った。

これは名誉な仕事なのだと。自らの席の向かいに座るラザムは浮かない顔でただじっと潜水艇の窓から海中を見つめていた。

「ラザム、君はこのプロジェクトにアンドロイド開発のエンジニアとして来ているが、ベンサレムとアンドロイドと何か関係が？」

「ベンサレムに渡った意識から我々がコンタクトを取る事は仮想上では可能だったが、サーバー内からアウトプットされる言語は我々の使用する言葉とは異なるものだ。故に私達が居る現実の世界とあちら側の世界を繋げるには、高度の情報処理能力を持ったアンドロイドが悠久的にデータを処理し続ける必要がある。私達は自ら記憶した思い出を海馬に記録するが、その記録を引き出す過程で脳内で我々にも理解できるような言語や映像に置き換えて引き出すだろう？ベンサレムは、その過程をアンドロイドに処理させる事を目的にしているんだ。つまり、サーバーからアウトプットされる情報は非圧縮された解析不能な言語なんだよ。君の記憶の奥底にある言語化されていない記憶と同様にな」

「つまり、ベンサレムに渡った後もこの世界と繋がれるという事か？」

「そうだ、これから死は終わりではなく単なる通過儀礼でしかなくなる。大事な人間を失った悲しみを癒やせる事をアルカナは謳っているが、実際は死を得てしまった人間を新たなリソースとして使用しようという意図もある。政治や科学をはじめ環境問題に至るまでな……どちらかというところち目的で利用する事も想定されてはいるだろうな」

「ところでクラウス、君は以前はアンドロイド専門だっただろう。どうしてサーバーサイドへ？」

「……それを私の口から言わせるのか。恥ずかしい話だが、あれ以来アンドロイドの電腦の中を覗こうとすると体調を悪くしてしまうんだ」

「……そうか、悪いことをしたな」

ラザムはそう言うのと、海中を眺めながら黙り込んでしまった。クラウスはラザムの様子が以前とは少し違う事に若干の違和感を覚えた。自分の元を去ってからどんな思いをしながら過ごす事になったのか、想像をしてみようとしたが自らのボキャブラリー不足に自分を責める結果に終わってしまった。

しかし、今はそう考える事すら贅沢な時間であるように思えた。「年間ずっと探し求めてきた男と再び一緒に仕事ができるという事実だけでもクラウスにとっては充分だったのだ。

ラダーに到着すると、クラウスは自らにあてがわれた部屋を早々に離れ、ラザムの元へ向かった。ラザムの研究室は204号室、高性能アンドロイドを開発する為に設けられた専用のブースだった。

中に入ると、無数のアンドロイド用の人体パーツが宙に浮いており、その中心に少女型のアンドロイドが鎮座していた。「歳ほどの風貌に栗色の長髪の少女で、少女は首の後部から電腦に直接接続を行うためのケーブルユニットに接続されていた。

「ラザム」

その少女型アンドロイドの側にラザムは居た。クラウスの声に気が付いたラザムは少々慌てた様子でモニターに映ったコンソールを閉じてからクラウスの方へ顔を向けた。

「クラウスか、どうしたんだ？」

「さっき君が話していた高性能アンドロイドの事が気になってな、様子を見に来た。少し慌てた様子だったが、何かの作業中だったのか？」

「いいや、アンドロイドの脳内を見ると体調を悪くしてしまうという話を思い出してな……」

「……？？？そうか、ありがとう。これが例の高性能アンドロイドか？」

「そうだ、名をPhantという。従来の家庭用アンドロイドとは異なる電脳を持ち高度な認知能力と情報、言語処理に特化している。私が地上に居た頃から開発は進められていたのだが、これが完成すればベンサレムと地上を繋ぐ架け橋になるだろう」

「Phant……まるで魂があるかのような名前だな」

「そうだ、脳内のニューロンが発する電気信号のエネルギーの連続性による集積が我々の魂の在り処だと分かった今、人工的に人間の脳を模した電脳によって擬似的に魂と錯覚するものを作ることが可能になった。もしかすれば、今後生物と無生物の境界は曖昧になっていくのかもしれないな……」

「不気味の谷か……それでもやはり機械は機械でしかないと思っうよ。電脳の中に何が詰まっているか分かる我々としてはな」

クラウスはそう言うのと、ラザムは乾いた声で肩を揺らしながら笑った。

「そうかもしれないな。けど私はこの子にもっと多様な可能性を与えてあげたい。たかが機械だと罵られようと屈せず立ち上がる事ができる……」

「……話しすぎた、今は一人で集中したいんだ。悪いがクラウスも自分の仕事に戻ってくれ」
「あ、ああ……」

ラザムに言われるがままクラウスは半ば強引な形で204号室を後にした。去り際に一人になったラザムはコンソールを再び立ち上げ、何か名前のような言葉を呟っていたが、聞き取れなかった。

ラザムの様子が以前とは違う事は明確だった、自分が知らない17年間の間に何かあったことは間違いないが、それを知る手立てが無い上に本人の口からそのような事が出てくる様子も無い。以前のように自分もラザムの傍でアンドロイドの開発に携わる事が出来ればと思ったが、今は既にお互い違う靴を履いている事は分かっていたのでクラウスの胸の中に悔しさが立ち込める。

「今は気にしすぎていても仕方がない……」

クラウスは自らの持ち場に戻っていった。

ベンサレムの開発は予想していたより進捗は進んでいた。サーバー自体の建造は既に終了しており、システム自体も基礎の部分は既に完成されていた。まだ入社して間もなかっ

たクラウスはアルカナ本社にレクチャーを受けながら仕様を理解し、サーバー内の拡張機能を実装させる仕事に従事した。

ラダーでの生活はクラウスが思っていたより過酷であった、海中にある施設であるが故に外の世界からの刺激を受けづらく娯楽にかなり乏しい。また、食事は毎食インスタントと言ってもいい程であった。稀に生の食材そのものが運ばれる事はあったが、調理をする人間は稀だった。日の光が届かない程の海中であった為か一日の感覚も曖昧で寝ても覚めても常に真夜中で仕事から離れられないような感覚を常に味わっていた。中には精神的な苦痛を訴える者も居たが、クラウス自身は研究員の精神的なストレス負荷が強い方がベンサレムの中で世界がより良いものになるという実感もあった為、稀にカウンセリングの機会は設けていたがストレス値の高い状態を何とか維持するしかないという状態のまま数ヶ月の時間が経っていた。

ある日、クラウスはラザムから呼び出しを受けた。ラザムが開発していた新型アンドロイドが遂に完成したという報告だった。変化の乏しいラダーの中での生活での大きな一歩であった為か、その日は研究員達の気分は高揚していた。

クラウスは204号室に入ると、そこにはラザムとアンドロイド開発担当のスタッフ達がスタンバイ状態で眠る Phant を見ながらその目が開く瞬間を今か今かと待ち望んでいた。

「来たか、クラウス」

Phant の前に立っていたラザムはクラウスを迎えた。目元に濃いくまを作っていたラザムの顔を見て、ここでの生活の過酷さをクラウスは伺った。

「遂に出来たんだな……しかし、酷い顔だぞ。ラザム」

「そういう君もすっかり頬がこけてるじゃないか、お互い様だ」

この日のラザムは比較的落ち着き払っているように感じた。無理もない、長い間自らの心血を注いできたものが遂に完成されるのだからクラウスは思い、久々にラザムと軽い気持ちで談笑が出来ているという気持ちで満たされた。

「待たせたな、それじゃあ Phant を起動しつくれ」

ラザムがスタッフに声をかけると、Phant に接続されていたケーブルが解除され眠り続けていた Phant は自らの身体で手をつきながら身体を起こし、閉じていたその目を開けた。周囲をきよろぎよろと見回し、自らが置かれている状況を理解しようとする仕草に204号室の職員達に歓声が沸き上がった。

「やったなラザム、これは大きな一歩だ……よくやったよ、本当に」

クラウスはラザムの肩を叩きながら声をかけると、ラザムは憑き物が取れたかのように脱力し、朗らかな表情をしていた。その様子を見たクラウスは心底安心した。そして今ならずっと自分が胸の中で抱え続けていた思いを伝えられるのではないかとクラウスは思った。

「ラザム、ちょっと来てくれ……」

ラザムの手を半ば無理矢理引きながらクラウスは204号室の研究員達と少し離れた場所へと移動した。大勢の人間の視線がPhantに向いている事を目で見て確認しながらクラウスは息を整えた。

「クラウス、どうしたんだ？」

目の前に居る男に自分の思いを伝えようとするのに「年もなかった。その間が苦しかった訳ではない、逆に言えばこの思いがあったからこそ自分は「年間生きて来られてそして今此処に居る事が出来ている。しかし、その思いを胸にしまい続けておくのはもうよそうとクラウスは決心した。

「ラザム、私は君が……」

クラウスが声を振り絞ろうとした瞬間だった。204号室の中に人間のものとは思えないおぞましい叫び声が一斉に響き渡った。金切り声とも少し違う、人間の声と機械的な声が多層的に混ざり合った大音量の叫び声を前にその場にいた研究員達は耳を塞ぐしか無かった。

「どうしたんだ！」

ラザムがPhantの様子を確認しようと研究員に声をかけようとしたその瞬間、研究員の一人の白衣の腹部から赤い染みが広がった。赤い染みからは手のような形のものが不自然に突き出しており、何か縄状のものを握っているように見えた。

排泄物のような匂いが部屋の中を一気に充満し、そこに居る全員が何が起きたのかを察知した瞬間、腹を食い破られた研究員は腹部から血をぼたぼたと流しながらなすすべもなくその場に崩れ落ちるように倒れ込み、動かなくなった。

倒れて動かなくなってしまった研究員の人影から現れたのは「歳程の風貌の女性、新型アンドロイドのPhantだった。彼女の右手には研究員の腹を破る際掴んだ大腸が握られており、犬の散歩をする時に使用するリードのように倒れ込んだ研究員の腹部に繋がっていた。

その様子を見たラザムを除く研究員達は恐怖におのき、逃げるように204号室を去ろうとするが、叫び声をあげながら物凄い勢いで走るPhantの手によって無残にも首を折られ、腕や心臓を引き剥がされていった。

「ラザム、このままじゃまずい！早く逃げようー！」

クラウスはラザムの腕を掴んで引っ張りながらこの場から逃げるよう催促をしようとしますが、ラザムは走り回るPhantをただ見つめながらぼんやりと何かを呟いていた。このままじゃ全員やられてしまうという危機感を本能的に察知したクラウスはラザムの前に立つことで彼の視界を強制的に塞ぎ、両肩を強く掴んだ。

「聞いているのか！早く逃げるぞ！」

クラウスの背後では Phant が依然として叫び声を上げ続けていた。自分の背後で何が行われているのか、犠牲になってしまった職員達がどのような姿になっているのか考えたくもなかった。

ラザムの眼が大きく開いた。ようやく自分の言葉に気が付いてくれたのかとクラウスは一瞬だけ安堵したが、それも束の間クラウスの背後に居た Phant の足音がこちらへ段々と近づいてくるような音を察知した。

「クラウス、危ない！」

ラザムはクラウスの身体を掴むと物凄い力で自らの身体の背後に寄せた。一瞬の出来事であったので、クラウスは何が起きたのか分からずそのまま床に対して倒れ込むとするが、背後から何か重いものが折り重なるように倒れてくるような感覚があった。クラウスの身体が床面に打ち付けられると同時にラザムの身体もクラウスに折り重なるように倒れ込むとクラウスの眼の前は真っ黒になり、これまでずっと鼓膜を刺激し続けていた Phant の叫び声も遠い先へと消えていった。

クラウスが再び目を覚ますと周囲は静寂に包まれていた。口の中から鉄分のような味と匂いと鈍い痛みを感じたので、自分が倒れ込んだ時の衝撃で歯が口の中を傷つけてしまったのだろうと思った。

たまらず唾を吐き捨てる赤い色の唾が口から放出された。やはりそうか……と思いつながら自己分析を進めていく中まだ視界のぼやけるクラウスの目に違和感のある光景がぼんやりと浮かんだ。

自ら吐き出した血入りの唾液が予想以上に大きな血溜まりを作っていたのだ。それだけではない血の匂いに様々な悪臭が混ざるような臭いが鼻につき、クラウスは自分が気絶してしまう前の状況を思い出した。

「ラザム、大丈夫か？起きろ、ラザム」

自分の身体の上に倒れ込むラザムに声をかけるが、返事は返ってこない。クラウスは何とかして這い出し立ち上がると、そこには先程まで練り広げられていたおぞましい光景の跡が残っていた。腹から胃や大腸を露出させて倒れ込む者、腕を折られ肩からあらぬ方向で折れ曲がった腕をだらしなくぶら下げた者、そしてもはや人と判別しても良いものなのか迷う程の肉塊にされた者。

そしてその中心に血だらけの Phant の姿があり、機能を停止させたのか血と臓物が散乱する中で眠っていた。

嫌な予感がしてクラウスはラザムの方へ視線を移すとその光景にクラウスの顔面から血の気が引いた。

「嘘だ……嘘だろ……」

クラウスの足元には腹部を抉られて倒れ込むラザムの姿があった。もう光を捉える事は

無いであろう目が虚空を見つめ、口はぽっかりと開いていた。その様子を見たクラウドスはラザムはもはや生きてはいないだろうという事を確信した。

「うううおおおおあああああああああああああああああああああああああああああああ……！！！！！！！！」

クラウドスはラザムの元へ駆け寄り、涙を流しながら喉が枯れるほどの勢いで叫んだ。心血を注いでラザムが完成させたアンドロイドがまさかこのような事故を起こしてしまう事など、思いもよらなかった。一人残されてしまった自分の悲しみとラザムの無念を想うと更に涙が吹き出してきた。

クラウドスは動かなくなったラザムの身体の脇を掴み上半身を持ち上げると引きずるようにしてどこかへ引っ張っていく。

「こんな事で終わらせてたまるか……せめて彼の意識だけでもベンサレムに……」

ラザムの生命活動は既に停止しており心臓から脳へ供給される酸素も停止していた為、一縷の望みではあったがクラウドスはラザムの意識だけでもベンサレムに転送しようと長い廊下を一人ラザムの遺体を引っ張りながらサーバルームへと移動していった。

肉体が死亡しても遺体の腐敗がまだ始まらない段階であれば、ベンサレムへ転送する過程で電気信号を脳に送り、脳内の情報の一部を解析・転送する事は想定されたので、クラウドスは遺体の重みでしむ腕を叱咤しながらゆっくりと運んでいく。

サーバルームに到着すると、壁面にはびっしりと遺体を収容しておく為の棚のようなものが埋め尽くされていた。クラウドスはその部屋の端末を血だらけの手で操作し、棚の一つを開けると何とかなしてラザムの遺体を持ち上げ、乱暴に棚の中にラザムの遺体を押し込んだ。

すると、ラザムの遺体が収容された棚が赤く発光した。クラウドスは急いでモニターのある端末の前に移動すると、両手を合わせて強く握りしめながらラザムの意識が無事ベンサレムへ転送されるよう神に祈った。

転送は無事完了し、遺体を収容する為の棚の一つが再び開いた事でクラウドスはほっと一息ついた。ラザムは自分達が作り上げた理想郷へその身を移し、完全なる死を免れた事に安堵したが、ベンサレムの稼働がまだ開始されていない今生者と死者の世界は未だ分断されたままであった。

自分が生きている限りもうラザムに会うことは出来ない、その事実がクラウドスの胸を深く突き刺し、クラウドスはその場で声が枯れるまで泣き叫んだ。

涙も枯れる程泣き疲れた後、クラウドスの脳内にある使命感が湧き上がった。ラザムが遺しそして旅立っていったベンサレムを今度は自分が、そして何としてもベンサレムも、Phantも自分の手で完成させなければならないと。

それが残された自分自身に出来ることであり、いつの日か再びラザムに会う事が出来る唯一の方法だと考えた。

クラウドスは立ち上がり、足早に端末の元へ向かうとアルカナ本社に先程まで起きた事態

を報告を行った。

ベンサレム稼働後、ラダー内部で活動する高性能アンドロイド Phant が暴走した事により職員数名が死亡した。Phant を完成させる為には更なる人員が必要でかつ、暴走による職員の身の安全を図る為にも銃器を装備した護衛用の人員の確保を頼みたいとアルカナ本社へ要請を行ったが、クラウスの申し出は却下された。

人員の補充こそ検討されたものの、今後同じような事態が発生した際に備え研究員自らが自分の手で事態に対処出来るよう武器のみの支給を実施する。という返答にクラウスは怒りに任せて端末を思い切り叩きつけた。いくら交渉しても条件は変わることは無かった。クラウスは、追加で防腐剤とカプセルの要請を行い通信を終えると、その場に力なく倒れ込んだ。

数日後、護身用のハンドガンが届いたが、人員は補充される事は無かった。クラウスの心には虚げな感情と Phant への憎しみしか残っていなかった。

「……こんなもののせいだー!」

クラウスは Phant の筐体に弾倉が空になるまで銃弾を撃ち込んだ。銃弾を受けた Phant は身体に至る所が破損していたが、元々起動していない状態であった為、表情は何一つ変わらなかった。

クラウスは、自らのプライベートルームへ戻ると、ラザムの遺体に残った血痕等を綺麗に拭き取り、黄色い防腐剤で満たされたカプセルの中に沈めると、カプセルの酸素を抜き自らの部屋に置いた。

既に動くことのないラザムの裸体を見て、クラウスは綺麗だと思った。今まで心の中で隠していたラザムへの想いがクラウスの中ではちぎれんばかりに大きくなっていった。クラウスはその日、ラザムと同じ姿になったまま長い時間を過ごした。

事が終わるとクラウスはラザムの最期を想像した。

ラザムは Phant に対して異常な執念を見せていた、その執念の出処がどこから来るものなのかは想像出来なかったが、Phant を完成させたいという強い意志があった事だけは確かだった。

自分に出来る事はラザムの遺志を継ぐ事だ、もうあのような事故は絶対に起こさない。

「待っていてくれ、必ず君が遺したものを作り上げてみせる……」

Phant に残ったバグを取り除き、そしてラザムが望んだ Phant の完成を成し遂げるのだ。クラウスはカプセルに入ったラザムの遺体に語りかけた。

ラザムの遺志を継ごうと決心してから、クラウスの行動は全て裏目に出てしまい遂には部下を全て失ってしまった。自分が選ぼうとしていた道は間違っていたのか、自分の目の前から愛するラザムが居なくなってしまったあの日に決めた思いは一体何だったのか。ク

ラウスはあの日から変わらない状態でカプセルの中にたゆたうラザムの言葉を待っていた。

そんな折、クラウスの部屋に Phant が硬い足音を鳴らしながら入り込んで来る。ラダーの中にはもう生き残っている人間は誰一人として居ない。クラウスはその足音の主が誰であるかは振り返って姿を確認せずとも分かっていた。

「お前か……結局お前のせいで全てを失ってしまったよ。お前が私の最も大切な人を……ラザムの命を奪ったあの日から。私はあいつの為に何としてでもお前を完成させなければならなかった……お前の意識たる部分を完全に消去し、ベンサレムを正常に稼働させる事が、私の……ラザムの望んだ事だったのに……結局お前に全て奪われてしまったよ」

クラウスは携帯していたハンドガンにマガジンを装填すると、手際良く安全装置を外し Phant の額に突きつけた。

「私は、ただ生きる権利が欲しかった。生きる為に自らの過去を知りたかった。確かに私はあなたの大事なラザムの命を奪ってしまった……けど仕方がなかった、私自身に呪いをかけたのはあの男自身だったのだから……私はあの男に復讐する権利があった」

クラウスは天井に向けてハンドガンをつまみ発砲すると、熱くなった銃身を Phant の額にこすりつけた。

「何を言っているのか分からんな、生きる権利……復讐する権利……そんな事あったまるか、モノ同然のお前に分かる筈などない。ラザムの……あいつの気持ち、そして私の気持ちなど……」

「私をモノだと言うのなら、あなたの背後にある男の遺体もただのモノである事に変わりはない。あなたは私という存在を完全に抹消する事があの男の望んだ事だと勝手に思い込んでいただけに過ぎない……」

「モノのくせにラザムを愚弄するのか……お前は機械だ……クルマやコンピュータと何一つ変わらない。お前が生きていると感じている事こそ幻想だ……」

クラウスはハンドガンを投げ捨てると、デスクトップ PC のあるファイルを立ち上げた。モニターにはアラートが表示され、緊急事態を知らせるブザーがクラウス達の居る空間を赤く照らし始めた。

「ラザムが願いが叶わない今、もはや私に残された手はこれしかない。ラダーを爆破しお前を……私やラザムもろとも全てを海の藻屑にするしかない……あとはコードさえ入力すればお前のくだらない幻想も終わりだ」

クラウスはコードを入力し、ラダーの機能を全て物理的に停止させた。これで全てが終わる。あとは、もしもあちら側でラザムに再会出来たなら、ただ詫びよう。そう考えていた。しかし、コードを入れた結果はクラウスが望んでいたものとは違っていた。緊急事態を知らせるブザーの音が鳴り止み、赤く点滅していたランプも全て元居た風景に戻っている。クラウスは戸惑いながら周囲を見渡すと、ラザムの遺体を収容していたカプセルから音

声が流れてきた。

「この音声ファイルを誰かが再生している時には、私は既に居ないかもしれない……だから、私の遺志をこの音声ファイルに残しておこうと思う。まず最初に皆に謝らなければならない事がある……私が開発設計した Phant という機体の中に私の娘の意識を移植した……これが許されない事だという事は分かっている、ただ私は見せたかったのだ、あの子に生きていて欲しかったのだ……ベンサレムに意識を転送するより前にあの子にこの世界の景色をもう一度感じて欲しかった……あの子の意識は誰にも改竄されないようプログラムの根幹に根ざしておいた。だから、何者にもこれを改竄する事は出来ない……。私は再び目覚めるあの子にきつと恨まれるだろう、人間ではなく機械の身体として目覚めるあの子の感覚や人生は全く別のものになるはずだ、それでも私はあの子に生きて貰いたかった。この事を皆に黙り続けてしまった事を非常に申し訳ないと思っている……特に、私をよく知るクラウドスは、私にとって特別な存在だっただけに、私の私情に巻き込んでしまつて申し訳ないと感じている……クラウドス、すまない。君はもう私に縛られる必要は無い……君は、君の思う幸せを手に入れる為に生き続けて欲しい……ありがとう……君を愛していた」

ラザムの声だった、クラウドスが想像し願ひそして欲する事を続けたラザムの音声クラウドスの耳元へ聞こえてきた。

「ラザム」

クラウドスはラザムの遺体が収容されたカプセルへ駆け寄ると、自らの身体をカプセルに擦りつけた。ラザムの声が音声ファイルを再生したものであって、彼の身体に何らかの変化が無いことは分かっていたが、クラウドスはそうせざるを得なかった。

「これがあの男が本当に望んだ事……私はあの男に生み出された呪い……」

背後から Phant が静かに語りかける。ラザムの本意を知ったクラウドスはその場で膝から崩れ落ちた。

「全て幻想だったのか……私が信じてやってきた事は……私は彼の……ラザムの願いを」

「そう、だからもう私に拘る必要はない……あなたはあなたの思うように……」

落胆するクラウドスに Phant が手を差し伸べようとした瞬間、クラウドスは Phant の手を跳ね除けた。

「そう、私は私の思うようにさせて貰う。お前に情けなどかけられてたまるか」

クラウドスはラザムの眠るカプセルの下部からヘルメットのような端末を取り出し、頭部へ接続するとハンドガンを自らの胸元に突きつけた。

「私が信じていた事が幻想だったとしてもお前はラザムを殺した、その事実が変わらない……だが私はお前を殺さない、勘違いするなよ。お前がラザムの子だから情けをかけている訳じゃないし、生命として認めたわけじゃない、私はお前のことが嫌いだから……呪

いでもなんでも抱えて生き続けるが良い、私が死んだらラダーに残った人間は誰ひとりとして居なくなる……お前は海底で一人誰とも繋がれないまま生きていくんだ……」

クラウスはハンドガンの引き金を引くと、弾倉から排出された鉛玉が自らの心臓を貫きラザムの遺体が眠るカプセルにもたれかかるように倒れた。弾丸はそのまま背中を突き破りカプセルへと到達すると、カプセルのガラス面は割れ、中から大量の防腐剤が漏れ出すと共にラザムの遺体がクラウスに覆いかぶさる。

大量の防腐剤を被ったクラウスの身体がもはや動くことの無いモノになると、頭部に装着された端末がクラウスの遺志をあちら側へと転送させる為、活動を始めた。

クラウスが目を覚ますと懐かしい景色が広がっていた。青年時代に通っていた大学の放課後、噴水広場のベンチで腰をかけていた。そこへ見覚えのある男がクラウスの元へ訪れた。ラザムだった。

「ラザム……すまなかった。私はあなたの願いを誤解して……」

クラウスはラザムの死後、自分がしてきた行いを悔いたかった。ラザムの願いを誤解しPhant……ラザムの娘に酷い行いをし続けてしまった。たとえベンサレムに転送されたとはいえ、許される事は無いであろうと思っていた。

「いいや、お前らしいよ。クラウス」

ラザムはそう言っていると、クラウスの頭を撫でる。

「私こそ、ずっと隠してしまっていてすまなかった……でも、もう私を縛るしがらみはもうここには存在しない。Phant……あの子には自分の人生を再び生きて欲しい。例えばそれが苦難の道であったとしてもね」

「さあ行こう、クラウス。私達の明日へ」

ラザムはクラウスに向かって手を差し伸べる。それを見たクラウスは胸の中にあった憑き物が取れたかのような穏やかな面持ちで立ち上がった。

「ああ……」

二人は手を繋ぎながら放課後のキャンパスを後にした。

Phantは、折り重なるように倒れるクラウスとラザムの遺体に近寄ると、防腐剤と混ざりあったクラウスの血を手に取り、指でその感触を確かめた。電脳のネットワークの奥底から、ベンサレムに転送された二人の声が聞こえてきた。

「パ・パ……」

Phantは一人、既に動かなくなってしまったラザムの遺体を見つめ続けていた。